

<書評>

松井広志 著
『模型のメディア論
——時空間を媒介する「モノ」』
(青弓社, 2017年, A5判, 240頁, 3000円+税)

佐藤 彰宣

街を歩いていると、書店やレンタルCD・DVDショップの閉店をよく目にするようになった。一方で、電子書籍や音楽ストリーミング配信、ビデオオンデマンドなどの台頭は著しく、仮想通貨や電子決済が大きな注目を集めたのも記憶に新しい。こうしたなかでは、インターネットの普及によって「脱物質化」され、もはや実体を持たないデジタルデータそのものが複製されるようになった「メタ複製技術時代」の到来を説くような議論も、一見すると説得力があるように思える。しかし、本書の著者は「デジタルデータでさえ、私たちは物理的なデバイスを媒介として感受している」と指摘する。だとすれば、「あるモノがどのようにしてメディアとなるのか」。本書の問題意識の根本はそこにある。

こうしたモノとメディアの関係を再考するにあたって、本書が注目するのが模型である。模型を「実物と私たちをつなぐメディア」として捉えることで、社会変動に伴う物質性の変化のなかで、メディアとしての性格（媒介性）がどのように変容してきたのかを観察しようと試みる。

本書はその際、「メディア考古学」の視座を採用している。エルキ・フータモらが提示したメディア考古学は、特定の時代背景のなかで「あるモノがメディアとして形成される」歴史的な層（連続性と断絶）を明らかにすることで、現在のメディアのあり方を問い直そうとするものである。

「メディア考古学」的アプローチに基づいて、模型という「モノ」が、各時代の社会のなかでどのような「メディア」として位置づけられていたのかを歴史的に記述しているのが、【第1部「歴史」】である。まず第1章「日本の近代化と科学模型」では、戦前期にあたる1930年代までにおいて、日本社会が西洋的な「近代化」を目指すなかで、模型には「未来」の機能を実現する「科学」としての意味付与がなされていたことを検証している。続く第2章「帝国日本の戦争と兵器」において、戦時下の総力戦体制のなかで、模型も「航空教育」の題材として動員され、帝国日本という「現在」の理念と合致し、軍事的な知識を涵養する「兵器」として規定される

状況を明らかにしている。さらに第3章「戦後社会におけるスケールモデル／プラスチックモデル」では、占領期から1970年代にかけて、高度成長期におけるプラスチックモデルなどの登場により、模型の性格が、「過去」の戦闘機などの形状を再現する「趣味」へと変化する様子が詳述される。

「戦前」・「戦中」・「戦後」との対比のなかで今日の模型のあり方が分析されているのが、【第2部「現在」】である。第4章「情報消費社会とキャラクターモデル／ガレージキット」では、「記号」があふれ「他者との差異化」を求める1980年代の消費社会のなかで、模型がガンダムなどの虚構のキャラクターをも題材としながら、自らの「解釈」を表現するメディアとなる状況について検討している。そして、第5章「グローバル化・デジタル化と拡散する模型」においては、2000年代以降のフィギュアブームのなかで顕在化した、受動的に消費する「コレクター」の登場を検証するとともに、各地に登場した実物大模型の受容について集合的記憶やアウラからの議論を導入しながら考察がなされている。

模型の「歴史」と「現在」を踏まえながら【第3部「理論」】では、ポピュラーカルチャーにおける「モノ」の位置づけを問う。第6章「ポピュラー文化における「モノ」——記号・物質・記憶」においては、言語論的転回以降の消費社会論への批判として、言語情報に回収されない物質性を捉えようとするモノ理論や、過去の体験を想起させる「物的環境」に注目した集合的記憶論を手掛かりに、記号的な意味だけではない、空間面・時間面をも含めた「モノ」の価値を検討している。さらに、第7章「「モノ」のメディア論——メッセージ・ネットワーク・オブジェクト」では、人のみならずモノも含めての「媒介性」を検討するアクターネットワーク論や、人間とは無関係な存在を問うたオブジェクト指向思考哲学などを手掛かりにしながら、「つながらない（メディア性が喪失してモノ性が露見する）」状態をも含めた「モノのメディア論」という視座が展開される。

本書の意義は、何よりもこれまで十分に検討されてこなかった日本社会における模型文化について、戦前—戦中—戦後—現代を結ぶ歴史的な変遷として記述している点にある。模型に込められた社会的な含意の変化を整理しながら、各時代のなかでの「科学」や「教育」との接続と乖離を指摘する点は、知識社会学としても興味深い。具体的には、模型に込められた意味付けが「科学」から「趣味」へと変化することで、評価基準も「機能」から「形状」へと変質していくプロセスを、特に背景としての材料（モノ）の変化に着目することで明らかにしているが、戦時下における「模型航空教育」実践の掘り起こしなどは、まさに模型のメディア考古学として重要な知見であろう¹⁾。

同時に本書は、単に「模型のメディア史」のみに閉じるのではなく、モノとメディアの関係の理論的に整理・更新しようと試みている点に大きな意義がある。社会学やメディア論のみならず、人類学や現代思想など多彩な学問領域への目配りをしながら、メディアの機能を強調する技術決定論と、その反対に人の優位性に固執す

る社会反映論，それら両者を乗り越えようとする「モノのメディア論」を提示している。とりわけ近年のメディア研究においては、「理論研究の停滞」が危機感をもって叫ばれる状況にあるが²⁾，本書はまさに理論的な更新を目指した重要な試みであるといえよう。

その一方で，本書における事例と理論の応答関係をどのように理解すればよいかはやや気になった。本書は「歴史」「現在」という具体的な事例の記述に対し，第3部の「理論」の説明がどう応答しているのかが評者にはやや見えづらいように思えた。もちろん終章にて両者の接合が目指されるが，前半のモデルの歴史社会的な変遷と，後半の「モノ」の理論のつながりが読み進める段階では分かりにくく，特に第3部は独立した論文のようにも読めてしまう。個別具体的な歴史記述に埋没するのではなく，かといって既存の一般的な理論を当てはめるのではなく，歴史記述を通していかに理論枠組みを練り直すことができるのか。こうした問題は歴史社会学の宿命でもあるが³⁾，歴史記述と理論との関係性について著者の考えを伺ってみたい。それは，おそらく本書が採用した「メディア考古学」の視座を方法論的にさらに発展させるためにも重要な点となるのではないかと考える。

またモデルと雑誌の密接な関係のなかで，雑誌というメディアがどのような意味を持っているのかということも気になる点であった。本書のなかでは，随所にモデルの歴史的变化を示す一次資料として雑誌の存在が言及・提示されている。ただし，そこには二重の媒介性が存在しているようにもみえる。すなわち，本書が目指す「実物と私たちを媒介するモデル」と同時に，モデル（製作）とモデル製作者同士（読者たちのつながり）を媒介する雑誌という二重の媒介性である。そうした二重の媒介性において，モデルと雑誌の関係をどのように捉えたらいいのかだろう。また一方で，雑誌の訴求力がなくなった（あるいは唯一の情報共有メディアではなくなった）現在のメディア環境において，何を手掛かりとしてモデル製作は実践されるのか。こうした点は，本書の議論が「雑誌のメディア論」的研究としての射程も有していることを意味していよう。

さらに本書での「アマチュアリズム」についても関心を覚えた。本書では，消費社会のなかで台頭する企業などの「プロ」との対比で，商業ベースに乗らない「アマチュアによる自作文化」に注目している。こうしたアマチュアへの注目，本書でも紹介されているように，モデルのみならず，先行研究においては他のメディア（自作ラジオなど）でも言及がなされている⁴⁾。一方で，メディア研究とは別の文脈として例えばスポーツ社会学においても，実は「アマチュア」と「プロ」の関係は大きな論点となってきた。スポーツ文化におけるアマチュアリズムは，「賞金や賞品のためにスポーツをしない」という規範を指し，近代スポーツの成立・発展とともに，オリンピックなどのスポーツ大会で掲げられるようになった。そこではスポーツの価値を有閑階級の「たしなみ」，つまりスポーツ自体を楽しむ「自己目的的」なものとして設定された。それは同時に，「賞金のために」という「手段的価値」

を否定する。だが、内海和雄はこうしたアマチュアリズムが、結果としてスポーツから労働者を排除するイデオロギーとして機能したと指摘している⁵⁾。アマチュアリズムは、有閑階級によってスポーツが資産と時間に余裕がなければ参与できないものとして囲い込まれ、国民全体へのスポーツの普及を抑止したのである。このように「アマチュアリズム」には、メディア研究などで対象とされる自作文化では「主体性」が読み込まれる一方で、スポーツ文化においては「階級性」や他者を排除しようとする「暴力性」として否定的なニュアンスとして捉えられてきた面もある。こうした相反する「アマチュアリズム」の捉え方についてどう理解すればいいのだろうか。もちろん双方で置かれた文脈が全く異なるが、こうしたズレは余暇研究や文化社会学として検討すべき論点にもなりえるのではないだろうか。

ただし、以上の所感はいくまで評者自身の個人的関心からに基づくものに過ぎない。評者のコメントは「無いものねだり」や理解不足の点も多く、おそらく著者の意図や関心とは離れたものもあったかもしれない。

いずれにせよ、模型の歴史的な変遷を手掛かりに、「モノとメディア」の関係に考察を加えようとする本書が、今後の文化社会学やメディア史に新たな展開をもたらさう、示唆に富む研究であることは間違いない。

[注]

- 1) 「模型航空教育」については、戦時下のスポーツ雑誌（『国民体育』博文館）に見られた「航空体育」を想起した。その意味で、「模型航空教育」の取り組みは、総動員体制の学校教育において「航空」がどのような意味合いを持っていたのかを考えるうえでも興味深い。
- 2) 「特集マス・コミュニケーション研究の現在：理論研究の視座」（『マス・コミュニケーション研究』90号、2017年）。
- 3) ピーター・バーク（佐藤公彦訳）『歴史学と社会理論』（慶応義塾大学出版会、2009年）やシーダ・スコチポル（小田中直樹訳）『歴史社会学の構想と戦略』（木鐸社、1995年）などを参照。
- 4) 溝尻真也「ラジオ自作のメディア史」（『マス・コミュニケーション研究』76号、2010年、139-56頁）や飯田豊『テレビが見世物だったころ』（青弓社、2016年）など。
- 5) 内海和雄『アマチュアリズム論』創文企画、2007年。